
ひぐらし・・・の？

璃瑠@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらし・・・の？

【Z-17】

N
1
5
0
1
M

【作者名】

璃瑠@

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃に、繰り返し起きる惨劇。

それを回避

しょうと、奮闘する一人の少年の話。

作者は原作はやっていないので、そーいうのが嫌いな人は見ないほうがいいですよ。

其の壱 記憶（前書き）

こんにちは、璃瑠@です。

なんで突然二

次創作を書き始めたかというところ、なんとなくしか言えませんw

もう一つの小説ですが、4回ほど制作途中のデータがとんでやる気がなくなったので、やる気が戻りしだい再開したいと思います。

さて、いつに

なるやら。

ちなみに設定としては、祭

囃しに近い状況で惨劇を止められなかった次の世界を舞台としております。
では、前置きはこの辺で

其の壱 記憶

「くすくす……残念だったわね。さよなら、圭一君」

そう言つて、彼女。鷹野 三四 たかの みよ さんは銃の引き金を引いた。

俺はゆっくりとせまってくる弾を目で追いながら、先に逝った皆に詫びる。

「……………ごめん、な」

最後に見た景色は、茜色の空をバックに不気味に笑う三四さんと、血飛沫をあげる自分の身体だった。

「うわああああああ！！！」

・・・って、アレ？今は夢か？

俺は目をぱちくりとさせながら、よく見覚えのある自分の部屋にいることに気づき、安堵する。

それにしても何てリアルな夢だったんだ。

・・・・・・本当に、夢だったんだよな？

俺は鮮明に思い出せる記憶の糸を手繰り寄せながら、眉をしかめる。

梨花ちゃんが変な病気の女王感染者。

山狗 やまいぬ と呼ばれる部隊。

そして、“何か”にあらがおうとした俺たち部活メンバーは、診療所の看護婦である鷹野三四さんに殺された。

断片的ではあるが、とてもリアルで生々しい記憶。

「やっぱ、夢だよな」

俺は苦笑しながら、頭をグシャグシャと搔く。

こんな平和な村で、あんな事があるなんて信じられない。

それに、銃で撃たれたはずの俺自身が今こうやって生きている。

これが、さっきの夢であるっていう何よりの証拠だ。

「圭ー！早くしないと、レナちゃんもう来てるわよ！」

「わかったー！すぐ行くから」

俺は下から聞こえる母さんの声に返事をする、学校へ行くための準備を急いだ。

「圭一君。遅いよぉ」

「ああ、悪いな」

俺が着替えて下の階に降りると、学校のクラスメイト、竜宮 りゅうぐう レナがいた。

なぜか、ちゃっかり食卓についてるのは何でだ？

「おいレナ。お前、家でも飯食ってきたんだろ？……太るぞ？」

俺の母さんからご飯が並々に盛られた茶わんを受け取ったレナは、ギギギギと錆付いたロボットの如く顔を動かし、俺の方を見た。

「圭一君、誰が太るのかな？かな？」

「い、いや……」

凄みのある笑顔を向けてきたレナを見て、思わず顔を引きつらせる。

「大丈夫よレナちゃん。よく食べて、その分体を動かせばいいんだから」

母さんがそう言うと、レナはほっと息をはいて美味しそうに食事を始めた。

「ほら、圭一も早く食べなさい」

「お、おう」

俺は頭を数回左右に振り、自分の席に着く。

それにしてもさっきの反応からして、レナが家でも朝食を食ったのは間違いないはずだ。

「……負けられないぜ」

レナの食欲に対抗意識を燃やしつつ、俺は食事を開始した。

「やべえ・・・げぶっ・・・もう、食えねえ」

「あはは。圭一君無理すぎだよ。でもしゃきしゃき動かないとね。魅いちゃん、待たせてるんだから」

「き・・・鬼畜め」

俺は今にも食べ物をリバーズしそうになっているのに、そんなに早く歩けるわけないだろ？

「ん・・・こういう時は胃を刺激してやればいいのか？かな？」

「いやいや！そんなことしたら吐くだろ！！」

俺は青ざめながら、何かを殴るそぶりを見せているレナを落ち着かせようと焦る。

たぶん今殴られたらリアルにリバーズするから。

「はうゝ！怯える圭くんかぁいいよぉ！！お持ちかえりいゝ！」

「待て！よるな！俺のお腹にこれ以上の刺激はマジでヤバいから！」

「・・・・・・・・二人とも、遅いと思ったら・・・・・・・・」

俺に襲い掛かろうとしているレナの後ろで声がした。

声の主は園崎 魅音 そのざき みおん。

レナと同じくクラスメイトで、俺たちの“部活”の部長でもある。

若干、というかなんかなり不機嫌そうな魅音は、状況を察してくれたのが大きいため息をつきながら、レナに静止の声をかける。

「ほらレナ。学校に遅刻すんよ？それと・・・・・・・・圭ちゃんの手をい

つまで握ってるつもりなのさ」

魅音の声に、ハッ和我に返ったレナは、顔を真っ赤にしながら俺にむかってグーパンを放ってきた。

「け、圭一君。大胆だよ、だよお」

逃げようとした俺の動きを封じるためかはわからないが、手を握ってきたのはそっちからだろ……。

可愛いモードに入ると、周りが見えなくなるのはレナの悪いところだ。

「レナ、相変わらずいいパンチしてるねえ……っと、圭ちゃん、急がないと本当に遅刻するよ」

「はうゝ。ま、待ってよ魅いちゃん」

地に伏せた俺を放置して、レナと魅音は走りだした。

「……………うん。雛見沢は今日も平和だ。」

慣れてしまった理不尽に苦笑しながら、俺は二人の後を追った。

（こんな場合、俺はどうすればいいんだ？）

遅刻ギリギリに教室の前へ着いたはいいが、見るからに罨が仕掛けられているドアの前で立ち往生しながら、俺は悩む。

毎度のことながら、日に日に罨の危険度が酷くなっているし、そろそろ怪我をしかねん。

しかし、俺も男だ。

ここは覚悟を決めようじゃないか。

俺は教室のドアに手をかけ、ゆっくりとソレを開いて——————
——————ドカッ！

顔面に強い衝撃を感じた。

（ああ、これはダメだ）

吹き出す鼻血とともに、俺は意識を失った。

「こんな・・・こんないい条件の世界でも、運命には打ち勝てないの？」

誰かの囁　すすり泣く声が聞こえる。

この声は・・・間違いない。梨花ちゃんだ。

「ねえ、羽入。あなたが協力してくれたこの世界でもダメだった。

赤坂もいる。鉄平はいない。誰も疑心暗鬼にならない。こんな・・・こんな世界でもダメなんて、本当に運命は打ち破れるの？」

「あう・・・ごめんなさい梨花。ボクには、わからないのです」

「・・・・・・・・・・そう」

「あらあら、二人とも待たせたわね」

梨花ちゃんと・・・・・・・・・・そうだ、羽入。

二人の声に混じって、鷹野さんの声が聞こえてきた。

場所はどうかやら、古手神社の境内のようだ。

梨花ちゃんと羽入は、手足を縄で縛られている。

「さあて、二人にはこれから死んでもらうわ」

狂気じみた笑顔で笑う鷹野のさんの手には、一本の鋏くわが握られていた。

『おい・・・やめろって!!』

俺は力の限り叫ぶ。

しかし、それが届くことはない。

「じゃあ、さよならね」

鷹野さんは手に持つ鍬を振り上げ、梨花ちゃんのお腹辺りを狙って振り下ろした。

「!!!!!!・・・・・・はあ、はあ・・・」

俺は息を切らしながら上体を起こした。

ズキッ。

額　　ひたい　　の辺りが痛む。

どうやら俺は、何かが顔に当たってそのまま学校で気絶してしまっ
たらしい。

鼻に薬品の匂いが付く。

「どうやらここは――――――」おや？前原さん、目が覚めましたか」

そう言つて、俺の顔を見ながらニコニコと笑っているのは入江先生こと、監督だ。

監督つてのは、ただたんに野球チームの監督をしているからそう呼んでいるだけなんだが。

「どうしたんですか？そんなに汗をかいて」

そして、監督はその笑顔をすぐに引つ込め、本職の医者らしい真面目な顔で俺を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・監督。今、監督以外に誰がいる？」

俺がそう聞くと、監督は、何を言ってるんだ？と、疑問を抱いたような表情をしながら首を横に振った。

「いえ。鷹野さんは所用で出かけてますし、前原さんを診療所まで運んでくれたみんなは学校に戻りましたよ？」

俺はそれを聞いて少し思案したあと、出来るだけ真剣な表情をつくり、監督を見た。

「監督……いや、イリーに、話したいことがある」

先ほどの夢で全て思い出した。

この雛見沢で起こった、たくさんの出来事を。

“他の雛見沢”で自分が犯した罪を。

そして、これから起こるであろう“惨劇”の犯人を。

前の世界で梨花ちゃんは言った。

『私は百年もの間、何度も何度も、惨劇を繰り返し体験した』と。

俺だけに、悲しげに言ってくれたその言葉は、心の奥に刻まれてあ

る。

今回こそは、絶対に助けてやるさ。

そのためには、やらなきゃいけないことがたくさんある。

まずはそつー————心から解りあえる仲間を集めよう。

其の壱 記憶（後書き）

どうでしたか？

原作をやっでない身で書く無謀さは、妄想でなんとかカバーしていきたいですねww

とりあえず、おかしい点があれば、ドンドン指摘してくれれば嬉しいです。

其の貳 あなたの言葉があったから

「……そんなことが………信じられません」

俺の話を聞いた監督は、ありえないとばかりに首を左右にふる。

「でも監督。俺が難見沢症候群について知っている。山狗についても知っている。これだけでも信用に値する価値はありませんか？」

俺がそういうと、監督は唸った。

「………しかし「監督ッ!!」」

どこか煮え切らない態度の監督に、俺は思わず声を荒げた。

「俺の話は信じなくてもいい。けど、仲間の命がかかってるんだ！
！お願いですから力を貸してください！！」

俺は頭を下げる。

犯人等についての記憶があったとしても、俺一人では何も出来ないのだ。

「・・・・・・・・・・わかりました」

監督は渋々といった感じでうなずいた。

「・・・・・・・・他に信頼出来る人は誰なんですか？私からも声をかけてみましょう」

「あ、ありがとうございますっ！！」

「・・・・・・・・まあ、気にしないでください。梨花ちゃんや沙都子ちゃんを守りたいという気持ちはよくわかりますし、それに、前原さん・いえ、Kの頼みとあれば無下に断れません。鷹野さんが何か企んでいるというのは、薄々気付いていましたから」

俺は再度お礼を言うと、右手を差し出した。

「これから、よろしく願いします。監督」

「はい。こちらこそよろしく願いします、前原さん」

俺と監督はがっしりと握手をした。

例の計画が実行される綿流しの祭まであと3週間もない。

カナカナカナカナ。

診療所の外では、ひぐらし達が静かに鳴き始めた。

診療所を後にした俺は、次なる仲間を集めるために近くの電話ボックスへむかった。

自慢ではないが、こんな俺に協力してくれそうな人はそうはいない。

監督と、あと二人。

心の友と呼べる人はあと二人しかいないのである。

しかし、俺はその二人が運命にあらがい、惨劇を打ち破る鍵になると知っている。

「・・・・・・・・もしもし」

『はい。・・・・・・・・おんやあ、その声は前原さんですねえ？』

運良くその人物が電話に出てくれた。

俺は受話器を握る手に汗をかきながら、口を開く。

「大石さん。雛見沢の“鬼隠し”について話したいことがあります。どこかいい場所はないですか？」

ガタツと椅子のようなものから勢い良く立ち上がる音が、電話越しに聞こえた。

『・・・・・・・・今、どこですか？』

俺が現在地を告げると、すぐに行くから待っていると指示を受けた。田舎道を、すごい速さでとばしてくるパトカーが見えたのは、電話をかけてから10分も経っていない頃であつた。

俺と大石さんは、場所をパトカーの中に移し、話の続きを開始した。

大石さんの表情は真剣そのもので、俺の喋ることを聞き漏らすまいと耳をたてている。

「なるほどお．．．にわかには信じがたい話ですが．．．．．わかりました。ワタシも協力させてもらいます」

「本当ですか！？ありがとうございます、大石さん！」

俺が勢い良く頭を下げると、大石さんは苦笑の笑みをこぼした。

「いえいえ……むしろ感謝させてほしいですねえ。敵討ちのチヤンスを与えてくれるんですから」

「敵討ち………?」

「……ええ。実は、その鬼隠し事件の最初の犠牲者がワタシの父と呼べる人でしてねえ………どうにかして解決しようとは思気込んでたんですが、いかんせん、その糸口すら見つけれず、ワタシももうすぐ退職ですから。わらにもすがりたいような気持ちなんですよ」

俺は大石さんの悲しげな顔を見る。

「大石さん。絶対に、次の犠牲者は出さないようにしましょう」

「ンッフッフ……当たり前じゃないですか前原さん。大石 蔵人 おおいし くらうど、警察人生をかけて前原さんに協力することを誓いますよ」

監督の時と同じように堅い握手を交わし、俺はまた一人信頼出来る仲間を増やした。

俺はパトカーから降りて、大石さんに手を振る。

「おやっさん。あんたの敵 かたき は、必ずとつてやりますからねえ」

そんなことをぼやきながら去っていく大石さんに一礼した俺は、夕方になり茜色に染まった空を見上げながらそつと息をはいく。

こんな俺の、妄想としか思えない話を信じてくれた二人に感謝をして、俺は帰路についた。

家に帰った俺は、晩飯と風呂を急いですませ、部屋に閉じこもった。

二人に任せてばかりではダメだ。

俺に何か出来ることを……………。

色々思案してみるが、妙案は浮かばない。

「そういえば……………」

そういえば、羽入はこの世界にはいるのだろうか。

彼女が実体化したのは、思い出せる限り2回程度だ。

きつと羽入も、運命を打ち破るための大きな鍵に違いないんだが……………。

「ああ！！ちつくしょう！何でこの世界の記憶がないんだよ！」

そう。何故かはわからないが、この世界の、あの夢を見る前の記憶がまったくとっていいほど無いのだ。

「みんなに聞いてみるか？いや、そんなことしたら、すぐに病院に連れてかれるだろ。うゝん……………梨花ちゃんに相談してみるか？」

「みい、ぼくに何か用なのですか？」

「ああ梨花ちゃん。実は――――って、ええええええええええ！！？な、何で梨花ちゃんが俺の部屋に！？」

いつのまにか俺の死角に立っていた梨花ちゃんを見つけて、俺は布団から飛び起きた。

「圭一が沙都子のトラップに引っかけた入江のところに運ばれたから、みんな心配してたのです。それで、罰ゲームになったのですが、こうやってお見舞いに来てやったのですよ？にぱっ」

につこりと笑う梨花ちゃん。

確かに梨花ちゃんが現在　いま　着てる服は、可愛いゴスロリで俺の萌え心をくすぐるが・・・・・・って、ちがあああう！

いや、違わないけどさ・・・・・・確かに梨花ちゃんが可愛いのは認めよう。それよりも・・・・・・。

「もしかして、俺の独り言聞いてた？」

こくんと頷く梨花ちゃん。

……まあ、いいか。手間が省けた。

「なら、単刀直入に聞く。羽入はこの世界にいるのか？」

俺がそう聞くと、梨花ちゃんは暗い顔して俯 うつむ いた。

その様子から察するに、どうやら羽入は……。

「残念ながら、この世界に羽入はいるわ。……私が大事に
つておいたプリンを食べた、あの忌々しい羽入め……」

ゴゴゴゴと、目には見えない威圧的なものを放ちながら、梨花ちゃん
が舌打ちをした。

俺は苦笑しながら立ち上がり、梨花ちゃんの頭を撫でる。

本当の梨花ちゃん、通称黒梨花の状態で話してくれたことが嬉しい
っただからだ。

前の世界で、本当の姿を見せるのは限られた人だけだから、と、俺
のハートを射ぬくようなことを言われたのを思い出す。

「圭一は、前の世界のことを？」

「ああ、覚えてる。もちろん“惨劇”の犯人もな」

俺がそう言つと、梨花ちゃんはにっこりと笑つて、すぐに表情を引き締め俺の手を頭の上からはらった。

「ふ、ふんっ！べ、別に嬉しいわけじゃないんだからね！」

「あああうう。梨花は素直じゃないのです。前、死ぬ直前に圭一の名前をふぐうっ！？」

どこからともなく出現して、僅 わず かに喜ばしげに語っている羽入の口を梨花ちゃんが塞いだ。

「こ、の、馬鹿っ！！あ、あとでキムチの刑決定ね！」

俺は首を傾げながら、二人のじゃれあいを見て笑う。

羽入も罰ゲームを受けたのか、梨花ちゃんが着ている黒のゴスロリとは反対の色、白のゴスロリを着ていた。

とりあえず、この世界にもまだ希望はあるってことだよな。

そうと決まれば、やることは大体決まった。

さて、鷹野さん。

覚悟しとけよ？

「具体的には、どうするつもりなのですか？」

「ああ、そうだな。……とりあえず、信頼できる仲間を集めようと思う」

「それがいいのです。それにしても………クスッ」

梨花ちゃんと羽入のじゃれあいが終わった後、とりあえず惨劇に打ち勝つための作戦を立てることになった。

そんな話し合いの中で、羽入が嬉しそうに笑いだす。

「何がそんなにおかしいんだ？」

俺が質問すると、羽入はなおニコニコと笑みを深くした。

何がそんなに嬉しいのか。

「前の世界では、惨劇に打ち勝つための条件は十分なほど揃っていましたのです。けれど、ボクたちはそれに負けました。……。この世界に来たばかりの梨花は、それはもう落ち込んでいたのです」

「ちょ、羽入！」

俺は話の続きが聞きたかったので、羽入を止めようと立ち上がった梨花ちゃんの手をとってソレを止めた。

「梨花はボクに言ったのです。『もう、何をしても無駄なのか』と。」

梨花がボクや沙都子の目を盗んで泣いていたのも知っていますです。だから……だから、今こうやって楽しそうにしている梨花を見るのは、とっても楽しいのです」

羽入がそう言うと、梨花ちゃんはどこか照れたようにぶっきらぼうに座り、そっぽを向いた。

「……その、一応心配してくれてありがとう、羽入。……それと圭」

「ん？どうした？」

「ぼくが元気になれたのは、圭が前の世界でぼくにかけてくれたのが大きいのですよ？あの一言がなかったら、ぼくはあの世界が終わった時点で諦めていたと思いますです」

俺は自分の記憶を辿り、恥ずかしさのあまり赤面した。

「……俺は小学生相手になんてことを言ったんだ……」

そうだな。あの言葉は、所謂 いわゆる “告白” ととらえられるものかもしれない。

「あうあう。ボクはソレを聞いてないのでとても気になるのです」

「ほら圭一。今、この場でもう一度言ってほしいのです。あの言葉が嘘じゃなかったって証明してほしいのです。にぱ」

ぐっ……梨花ちゃんの笑顔が黒い。

絶対楽しんでやる。

けどまあ、あと一度くらいなら言ってみてもいいかな。

梨花ちゃんが俺の言葉で救われたのなら、それほど嬉しいことはないから。

だからもう一度だけ。

俺は立ち上がり、梨花ちゃんを立たせる。

その肩に手を置いて、決心とともに声をあげた。

「梨花ちゃんは俺が守るから！きつと、きつと、俺が死んでしまっても、また次の世界で梨花ちゃんと会って、んで、全力で守ってみせるー！」

少し台詞は違つかもだけど、確かこんなことを言っただけ。

・・・アレ？梨花ちゃん、顔を真っ赤にしてフリーズしてる？

言っただけも恥ずかしかったが、言われた本人も相当だったに違いない。

「あうー！あうー！告白なんです！ついに梨花にも春が来たのですー！」

騒いでいる羽入は放置。

つか、母さんと父さんに聞こえてないよな？

・・・聞こえてたかもって考えたら、無性に死にたくなってきた。

「と、とりあえず圭ー！」

梨花ちゃんはズビシと俺に指を立てて、顔を真っ赤にしながら宣言した。

「絶対、絶対、惨劇に打ち勝つわよ！」

「……………わかってるよ」

俺は苦笑しながら、了解の意を示した。

其の弐 あなたの言葉があったから（後書き）

こんにちわ。

さて、圭一のキャラがブレつつあるのはどうしましょうかね？w

もう、後戻りはできないのかな？w

とりあえず、自分としては惨劇に打ち勝った後の話を書きたいので、惨劇の内容等については超特急で進んでいきたいと思いますwでは、また次回

其の参 大事な話（前書き）

圭一のキャラがブレすぎてゐる・・・。

其の参 大事な話

「・・・・・・・・・・どういふことなんだ？」

目が覚めると、俺の横には羽入が寝ていた。

これは、何の冗談なんだ？

俺はダラダラと冷や汗を流しながら、昨晚の出来事を思い出す。

確か、梨花ちゃんと羽入との三人で色々話し合ったんだ。

それで、夜も遅くなってきて沙都子が心配するといけないからと、二人は帰宅したはず。

・・・・・・・・・・うん。間違いなく羽入は梨花ちゃんと一緒に帰ったはずだ。

それなのに、この状況はなんなんだ・・・・・・・・。

「あうゝ・・・・・・・・もう、食べられないのれふむにやむにや・・・・・・・・」

（うおおおおおお！何なんだ今のは！！羽入が寝言を言っただけで、俺の萌えメーターがはち切れそうになったぜ！）

まあ、たぶん、その原因は羽入の着ている服に問題があると思う。

昨日の夜まで着ていた白ゴスロリではなく、寝やすそうな薄着1枚なのだから。

チラチラと見える羽入の肌。見えそうで見えない太ももの先の神域。

この状況で萌えない、いや、燃えない男がいるだろうか？それは否だ。

男たるもの、この状況を楽しまなければ損も損。大損である。

「・・・・・・・・・・落ち着け前原圭一。クールになるんだ」

俺は自分の高ぶる気持ちを抑えつつ、邪魔が入らないように部屋のドアから顔を出し、キョロキョロと様子をうかがう。

今日は何故か早く起きたので、まだ朝食までには時間がある。

つまり、母さんの邪魔はないと考えていい。

問題は父さんだが、見つかったら見つかったで許してくれそうな気がするので、問題なしとしよう。

俺は自然とにやける頬を、必死で抑えようとするが、まあ、無駄である。

「さあて、ぐふふふ。俺はこれから惨劇に挑まなきゃならないわけだし、きつとこれは神様からの贈り物に違いない」

はあはあ、と息を切らせながら羽入に近づき、唾をのむ。

そしてゆっくりと、羽入の肌へ手を伸ばして「……………」
圭一、何をしてるのですか？」

ゆっくり振り返ると、開かれたドアの向こうには、息を切らしながら、苛立ったような表情をしている梨花ちゃんがいる。

「……………」と、いうわけなのです」

「な、の、で、す、じゃなああああい！！そこで、何で寝ちやうのよ馬鹿羽入！」

「ばっ、馬鹿はひどいのです！今すぐ訂正してください梨花！」

騒ぎだす二人に変わって今朝の状況を説明するところだ。

羽入は、俺にどうしても伝えたいことがあつて、梨花ちゃんと沙都子が寝静まってからこっそりと俺の家に来たらしい。

どうやって侵入したか、までは教えてくれなかったが。

んで、俺の部屋に入っただいいものの、俺は爆睡中。つられるよう

に羽入も寝てしまった、と。…………俺の横で。

そして梨花ちゃんと言うと、朝から沙都子に叩き起こされてみれば、羽入がいなくなっていて、“なんとなく”俺の家に来た、ということらしい。

沙都子には心配するなと言ってあるから大丈夫と梨花ちゃんはあるが、本当に大丈夫だろうか？

まあ、沙都子のやつは小学生の割りにはしっかりしてるから、大丈夫だよな。

「とりあえず羽入。あんたの言いたいことはわかったわ。それで圭一。あなたはさっき何をしようとしたのかしら？」

梨花ちゃんが修羅のような顔で睨んでくる。

つか、小学生相手にビビってる俺って…………。

「あう」。ボクも圭一が何をしようとしてたのか気になるのです。確か圭一は、そのドアから顔を出しながら、『ぐふふふ…………』ってニヤニヤしていたのです。それで圭一はボクに少しつつ近づいてきて…………あう」

さっきの光景を思い出したのか、羽入の頭から湯気が吹き出した。

顔は熟れたトマトのごとく真っ赤である。

「ば、馬鹿っ！俺はそんなこと」

「本当に、してないの？」

なんとか言い訳を言おうとした俺に、梨花ちゃんがズイツと体を寄せて、先ほどより強く睨んでくる。

だああああ！梨花ちゃんは何をそんなに怒ってるんだ！？俺、何かまずいこと……まあ、俺が羽入にしようとしたことは多少まずったかもしれないが……。

てか、羽入。起きてたのか……まさか、やつも頭の中は真っ黒クロスケか？

それで俺を陥　おとし　れて楽しんで……いや、魅音や梨花ちゃんじゃあるまいし、それはないよな？

とりあえず、今はこの状況をなんとかしないと……。

俺は頭をフル回転させて、言い訳を考える。

今こそ、口先の魔術師の実力の見せ所じゃないか。

「そ、そうだ。実はなーーーーー」

「圭一君。朝っぱらから、部屋に女の子を二人もつれこんで何をしてるのかな？かな？」

「圭一さん、不潔ですの」

そんな処刑宣言 ことば が聞こえてきた俺は、瞬時に両手をあげてギブアップを示す。

そして、熱い魂の叫びを口にした。

「男がエロくて何が悪いんだあああああー!!」

直後、レナパンという台風が俺を襲ったのは言うまでもない。

「な、なあゝんだ。そういうことなら早く言ってくればよかったのに」

羽入が事情を説明すると、レナは納得顔で頷いた。

説明なんてする間もなく、ものすごいストレートを放ってきたのはどこのどいつだよ……。

「ご、ごめん圭一君。レナのこと嫌いにならないでね?」

「なるわけないだろ?心配するなよ」

いや、まあ、上目遣いで頼まれちゃあ拒否なんて出来ないよな。

つか、俺の中でレナはそういうやつだってわかりきってるから。

別の世界の記憶がある俺からすれば、レナは畏怖の対象でしかないし。

まあ、友達だとは思ってるんだけどな。

「とりあえず、さっさと飯食って学校に行こうぜ。魅音も待ってるだろうし」

「そうですね。というか圭一さん。あなたのせいでワタクシとレナさんは朝食を食べてないんですよ？」

「……俺のせいなのか？」

「あああうゝ。ボクもお腹ぺこぺこなのです」

「圭一、ぼくたちの分の朝ご飯も用意してもらえますか？」

そんな梨花ちゃんの提案に、俺は首を縦に振る。

母さんのことだからどうせ、みんなの分もご飯の準備をしてるに違いない。

魅音だけ仲間はずれにして悪いが、みんなでご飯を食べるとするか。

「圭ーく、みんなく、ご飯出来たわよー」

そんな母さんの声が聞こえてきたのは、それからすぐのことだった。

「ふうん。おじさんだけ仲間外れにして、みんな仲良くってわけかい」

いつもの集合場所へ行ったとたん、魅音は俺たちを見るなりそう言っただ。

あからさまに不機嫌である。まあ、でも、たまたまこうなったわけだし、仕方ないよな？

っていうか他のみんな。

なぜ俺をジト目で見てくるんだよ。

別に俺だけが悪いってわけじゃあ・・・。

「さて、圭ちゃん。詳しく説明してもらおうか」

「・・・・・・・・・・はい」

俺は渋々事情を説明することに。

所々で茶々を入れてくる梨花ちゃんと沙都子。

まじで勘弁してくれ。

「・・・・・・・・・・そういうことなら、仕方ないけどさっ」

説明し終わると、魅音はプイッとそっぽを向いて歩き始めてしまった。

「あ、待ってよ魅いちゃん！」

その後を追い掛けるレナ。

それに沙都子と梨花ちゃんが続く。

俺も追い掛けようかと足を踏み出すと、羽入が俺の服の裾すそを掴んできた。

ちなみに、羽入の服装はちゃんとした制服である。一旦着替えに戻ったせいで、この場所に来るのが少し遅れたのだ。

「どうした？」

俺が質問をすると、羽入は真剣な顔をしながら口を開いた。

「圭一に話したいことがあるのです」

「そういえば、羽入が家　うち　に來た理由は、その話とやらが目的だったな」

「あうあう。ボクがこれから語るのは、鷹野の“過去”についてなのです」

鷹野さんの過去か……確かに、あんな事件を実行するのは相当の覚悟と勇気が必要である。

気にならないといえば嘘だ。

「わかった。聞かせてくれ、羽入」

今日も学校はサボることになるけど、雛見沢のためだ。

少しくらい大目に見てくれるよな？

其の四 開戦（前書き）

原作崩壊w設定とかが全然わかりませんごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんry

其の四 開戦

「そんなことがあったのか……」

俺は羽入から話を聞いて、眉をしかめる。

鷹野さんが小さい頃に体験した、壮絶な運命。

それは想像も出来ないほど辛いものであったと、安易に予想が出来る。

人気のない、古手神社の境内で、俺は鷹野さんに対する考えを改めた。

ただの敵から、別の、ある意味惨劇といってもいい運命に歪められた鷹野のさんを救ってあげたいとすら思い始めていた。

「圭一は、優しいんですね」

俺がその気持ちを話すと、羽入が嬉しそうに微笑んだ。

「いや、さ。俺も鷹野さんも他のみんなも、同じだなあって思ったから。俺たちだけ惨劇を回避出来ても、誰か一人が苦しんでたら何の解決にもならないだろ？」

前の世界でも、ぼんやりとはあったが、別の世界での記憶があったのを思い出し、苦笑する。

惨劇、雛見沢症候群という狂気に犯された俺がやってきた罪は消えることはない。

けど、今だにその狂気に踊らされている人がいたら、手を差し伸べたいと思うのは優しいさなのだろうか？

いや、たぶん、ただの自己満足 エゴ にしかすぎないんだろうが。

「違うのです。そう思える圭一は、自己満足主義者 エゴイストなんかではなく、立派な優しい人なのですよ。あうあう」

「ははは。ならいいんだけどな。……。それと羽入、一つ、頼みたいことがあるんだけど、いいか？」

「あう？それは内容によりますですけど……」

「ああ、それはなーーーーー」

「鷹野さん。少しいいですか？」

さっそく入江診療所に向かった俺は、入るなり鷹野さん呼び止めた。

診療所の廊下で止められた鷹野さんは首を傾げながら、俺を見つめてくる。

「あらあ？前原……圭一君だったかしら？私に何か用？」

妖艶に微笑むその顔は、過去の話を知った今ではどこか寂しげに見える。

「単刀直入に言います。“鬼隠し”を止めてください」

「ッ！？何を言ってるのかしら？」

とぼけたように眉根を寄せる鷹野さん。

その表情には、少なからず驚きの色が混じっていた。

「俺は全部知っています。“鷹野さんが”やってきた、鬼隠し、いや、人殺しの数々を」

「いきなり何を言いだすかと思ったら……圭一君、具合が悪かったりしない？」

「言つときますけど、俺は雛見沢症候群にはかかっていませんよ？」

雛見沢症候群。その単語を口にした途端、鷹野さんの目が鋭くなった。

「あなた、どこまで知ってるの？」

「そうですね。 “ だいたい ” は知っていますよ？例えばそうだな・・・・・・高野 一二三 たかの ひふみ さんのことか」

「ツツ！！い、入江先生！」

「監督なら呼んでも来ませんよ？理由は・・・・・・わかりますね？」

「くっ・・・裏切られた、ということね」

高野さんはふうと息をついて、ナース服のスカートを捲り上げた。

思わず目を逸らしてしまいそうになるが、チラッと黒いものが見えてとどまる。

「計画以外では人殺しをあまりしなかったんだけど、残念ねえ」

左手で頬に手を当てながら、右手に持った拳銃を俺に向けてくる鷹野さん。

「そんなことまでして、一二三さんが喜ぶんですか？今の鷹野さんの姿を見たら、一体なんて言うか」

「だまりなさいっ!!」

俺の言葉に、鷹野さんが大きな声をあげる。

「あなたに、平和ボケしたガキなんかには何がわかるっていうのよ!!」

「わからないさ!!けど、もし俺が一二三さんの立場だったら、研究よりも娘のように大事にしていた人のことを優先的に考えるはずだ!鷹野さんは、そんな一二三さんの気持ちもわからないのか!？」

「何よ何よ!!どうやって調べたかはわからないけど、私はきちんとお祖父ちゃんの気持ちは理解してるつもり!!」

「嘘だ!!」

「嘘じゃない!」

「いんや、嘘だね!一二三さんは本当に、鷹野さんよりも研究を大事にしていたのか?」

「ええもちろん！お祖父ちゃんはあれだけ必死に研究を続けて・・・あ・・・」

「鷹野さんが風邪をひいたとき、一二三さんは何をした？研究を一時中断してまで、鷹野さんの看病をしたんじゃないのか？」

俺の言葉に、鷹野さんが手に持っている拳銃が小刻みに震え始める。

俺は知っているのだ。

羽入から聞いた、高野一二三という人物の優しさを。

一二三さんが死ぬ間に言った、最期の言葉を。

『三四子・・・元気だな』

そう。一二三さんが最期に残した言葉は難見沢症候群のことではなく、紛れもなく鷹野三四さんのことだった。

「そ、そんな・・・なら私は今まで何を・・・」

「別に俺は、鷹野さんが間違っているとか言いたいわけじゃない。確かに親同然の人の望みを叶えたいって気持ちは少なからずわかる。．．．けど、そのために無闇に人の命を奪っていいのか？そんなの、許されるわけない」

ガチャ。

銃は床に落ち、その音が静まり返っている診療所に響いた。

鷹野さんは両膝を床につけて涙を流し始める。

「監督．．．」

「ええ、わかってます」

どこからともなく現われた監督に声をかける。

鷹野さんは今、低いレベルではあるが、難見沢症候群に発症している。

俺みたいなガキの話を真面目に聞いてくれたのも、それが大きいだ

ろう。

まあ、あと少しは、俺が伊達に口先の魔術師なんて呼ばれてないってことの証明にもなるな。

「どうやら予防接種を施しても、完全に雛見沢症候群を抑えられるわけではないということですね」

鷹野さんの肩を抱きながら、監督がつぶやく。

「なあ、監督。そんなところをトニーに見られたら」

「富竹フラアアアアアッシュ！」

「ぐわあ！？目、目があ！！」

「だから言わんこっちゃない」

もしもの時のために、富竹さん、もとい、トニーに待機してもらってたのを忘れていたのだろうか、監督は。

「んっふっふ」皆さんお揃いですねえ」

「大石さん。待ってましたよ」

監督は鷹野さんをトミーに引き渡し、目を擦りながら大石さんに挨拶をする。

「この様子だと、“山狗”にも発症者が出ていそうですね」

もちろん、俺、トミー、監督、大石さんは全ての事情を知っている。

どうやら今回の惨劇 シナリオ は、山狗が悪役のようだ。

けど、これだけのメンツが揃ってるんだし、負ける未来は見えない。

さて、ちゃっっちゃとこの悪趣味な運命を打ち破ってやるぜ！

「前原さん。本当に、いいんですかあ？」

俺は大石さんの言葉に頷く。

ずっしりと重い本物の銃を手に、木の影で息を潜める。

これは俺が言い出したワガママだ。

自分の手で終わらせたい。

前の世界で、誰も救えなかったからこそ、自分の手で。

「死なないくださいよお？もし前原さんに何かあったら、園崎の魅音さんにどやされますから」

そう言つて苦笑する大石さんの言葉に、俺は親指を立てて返事をする。

「当たり前ですって。部活メンバーのマスコットの俺が死んだり

したら、華がなくなりますから」

震える手を隠すように、冗談めかして笑う。

部活の皆は大丈夫。羽入には、俺が危ない橋を渡っていることは内緒にするよう頼んであるし、こころおきなく戦えるさ。

「さあて、いつちやりますかあ」

トミーには、鷹野さんが落ち着くまで傍にいてやるよう言っている。

俺と大石さん、興宮 おきのみや 署の数人と監督。

若干不利な感じはするが、この方がやっぱり、燃えるよな？

大石さんの一言で、皆は一斉に動き始めた。

「よし、今度こそ終わらせてやる」

俺は一人呟いて、白のワゴン車へと銃口を向けた。

其の四 開戦（後書き）

誤字脱字とかあれば、報告してくれるとありがたいです

其の伍 終幕（前書き）

展開早すぎる・・・。。どうしてこんなことになったのか、自分でもわかりませんw

其の伍 終幕

「すみません、少しお話いいですかあ？」

囃 おとり 役の大石さんが、白のワゴンに近づき声をかける。

相手がどんなアクションを起こすかわからないため、俺は緊張の糸を張り詰めたまま息を飲む。

この場所からじゃ大石さんたちの会話は聞こえない。

耳をすませながら、大石さんたちの方に意識を集中させる。

パンッ！

銃声とともに、大石が倒れこんだ。

俺はそれと同時に、ワゴン車のタイヤを狙って引き金を引く。

（……当たれ！！）

銃の反動で肩が痛むが、今はそれどころではない。

「大石さん!!」

俺は居ても立ってもいられず、大石さんの側に駆け寄った。

「警察だ! 投降しろ!」

俺に続き、興宮署の人たちがワゴンを囲んだ。

「・・・・・・・・」

しかし、そんなことなど気にしていないかのように車は発進した。

車の正面に立っていた刑事さんたちはそれをギリギリ回避する。

「みなさん気を付けてください! もしかしたら彼らは――」

監督が何か言おうとしたが、それは車のエンジン音にかき消された。

白いワゴン車は少し走ったところでUターンし、アクセル全開でこちらに向かってくる。

「大石さんをこっちに！」

「はい!!」

俺は刑事さんの一人に大石さんを引き渡すと、さっきまで隠れていた森の中に飛び込んだ。

間一髪のところでは車を避け、木の影で一息つく。

「いやあ、すみません前原さん。歳はとりたくないもんですね」

息を荒げながら、ハハハと笑う大石さん。

その肩からは、銃で撃たれたのか血がとめどなく出てきている。

「……このままだと危険ですね」

監督は大石さんの肩を見ながら呟く。

「傷は浅いですが、出血が酷すぎます。このままでは……。」

「大丈夫ですよ、このくらい」

大石さんは監督の言葉を手で遮りながら立ち上がった。

「大石さん、しかしっ!!」

「んっふっふ……入江先生……ワタシはねえ、ここで何もしないで助かるよりも、何かをして死ぬほうがいいんですよ。そうしないと、絶対後悔しますからねえ」

大石さんのその言葉に、俺も監督も、興宮署の人たちですら何も言えなくなった。

大石さんの言わんとしていることはなんとなくわかる。

だから俺は、それを止めるわけにはいかない。止めちゃいけないんだ。

キュルルルッ！

遠くでタイヤの滑る音が聞こえた。

どうやら、先ほど猛スピードで走っていったワゴン車が再びＵターンをしたらしい。

「おそらくワゴン車の運転手は、難見沢症候群が発症しています。きつと彼には、私たちが殺人鬼か何かに見えているのでしょうか。．．．．．考えたくはないですが、L5に到達している可能性もあります。はずです」

「ということとはつまり．．．．．」

監督の言葉に、俺は思わず舌打ちをしたくなる。

「ええ、彼、もしくは彼らを助けるには、命を懸けて行動しなければなりません」

確かに、話し合いなどは無駄であろう。

それは何度も、自身で“経験済み”だ。

「ッオラア！！さつさと姿見せんかい！！」

ワゴン車が止まる音とともに、誰かの怒声が聞こえてきた。

「小此木さん・・・また厄介な」

監督は渋い顔をしながら、声をあげた人物を睨む。

「どうやら、私たちは山狗全てを相手にしなければならぬようです」

確か小此木さんは山狗のリーダーだったか・・・。

「監督、どうするんですか？」

俺は渋い顔のままの監督に質問する。

「とりあえず、この森から出るのは得策でないでしょう。武器の数はこちらが劣るはずです。・・・そうですね。森に散らばり、

確実に敵を減らしていくのがいいと私は思います」

「んっふっふ……いいですねえ。血が騒ぎますよ」

大石さんはそう言いながら立ち上がり、興宮署の人たちに笑いかける。

「大丈夫です。大石さんにはまだ生きてもらいますから」

「いやあ熊ちゃん。それはそれは。ワタシの背中、任せましたよ？」

さすがだな、と俺は関心する。この人たちは、なんて強いんだろうか。

「監督、俺たちも頑張らしましょう」

「………わかりました。私としては、前原さんのような子供に戦ってもらいたくないんですが、言っても聞かないでしょう？」

「もちろん。大石さんや監督だけにいい格好させられないからな」

俺はニカッと笑ってみせた。

本当は、今すぐこの場から逃げ出したいけど、でも、それをして俺はただの負け犬だ。

百年間の借りは、きつちりと返してもらおう。

「では皆さん、準備はいいですかあ？」

大石さんの一言に、皆が気を引き締める。

「では、行きますよ？」

その言葉で、俺たちは一斉に森の奥へ駆けた。

「居たぞオ！！殺せエ！！」

誰かの怒鳴りが響き、多数の銃声が後ろから聞こえる。

さて、楽しい部活 ゲーム の始まりだ。

「・・・・っし！これで三人目」

俺は木の影に隠れながら、作業着を着ている彼らの足を狙って発砲する。

そして倒れたところを銃で殴って気絶させる。

全て大石さんに教わったことだ。

あらかじめ渡されていた手錠を気絶した人の手につけ、次の標的を
目指す。

「ッッ！！」

しばらく動いていると、小此木さんを見つけた。

きつと彼をなんとかすれば、この惨劇は打ち破れる。

俺たちは初めて、昭和58年の7月への扉を開けるんだ。

胸が高鳴り、手に汗が滲んでくる。

緊張、高揚、不安。色んな感情が混ざったような妙な気持ちになり、思わず頬の端を釣り上げた。

（これで、終わりだ……）

俺はしっかりと標的を見定め、銃の引き金を引く。

パンッ！ガササッ！

しかし、弾は小此木さんを少し擦っただけで草むらへと姿を消した。

（……まずいつ……！）

俺はすぐさま体勢を建て直し、この場から離脱しようとするが、それとも無駄に終わった。

「隠れとらんで出てこんかい」

小此木さんの銃口が、しっかりと俺を捉えていたからだ。

両手をあげながら、俺は立ち上がる。

「小此木さん、わかっているんですか？あなたは今」

「難見沢症候群にかかるとるんやろ？」

「……まさかこの人、自覚症状があるのか？」

「喉の辺りが無性に痒いし、まわりが全員敵に見える。こいつは、難見沢症候群の症状とピッタリ当てはまるわな」

「そこまでわかってて、なんでこんなことを！」

「わかってるこそだからだろうねえ。今はとつても自分を抑えられない気がしないんだよ。だからさあ……死んでくれんかね」

そう言って、小此木さんは銃の引き金をゆっくりと引いた。

俺は死を覚悟して目を瞑る。

ガキインッ！

銃声の直後に、鉄と鉄がぶつかり合うような音が響いた。

ゆっくりと目を開くと、そこには、白っぽい服を来た死神が立っていた。

「れ、レナ！？」

俺は、驚きながらその死神に声をかけた。

大きな岩　　なた　　を手に、楽しそうに笑っているその姿はまさに、死神を彷彿とさせる。

「圭一君、言いたいことは一杯あるけど、とりあえずそれは後回しだね」

レナはそう言うのと、小此木さんに岩を向けた。

「残念だったね。この勝負、レナたちの勝ちだよ」

「ああ？何を言ってーーーーー」後ろを向いてくださいまし」「」

突然の声に後ろを振り向いた小此木さんの顔をめがけて何かが飛んで、見事に直撃した。

「め、目がああああああああ！！」

顔を押さえながら蹲　　うずくま　　る小此木さん。

「おーっほっほ！ワタクシの“特性キムチボール”の威力はいかがですのー！！」

「みい、キムチの他に辛子、唐辛子、ワサビなど辛いものがたくさん入ってるのですよ。にぱ」

「ああああ！考えただけでも恐ろしいのです。梨花と沙都子は鬼なのです、悪魔なのですう！」

ガサガサと、草影から梨花ちゃん、沙都子、羽入が姿を現した。

「ぐうううーき、貴様らア！！」

「おおっと、部長である私のことも忘れてもらっちゃあ困るねえ」

トドメ、とばかりに、魅音が小此木さんの頭に銃を突き付ける。

「うちの部活メンバーに手エ出したら、タダじゃおかないよ？」

小此木さんはグッと唇を噛み、手に持っていた銃を下へ落とした。

どうやら降参のようだ。

「どうして、来たんだよッ！！」

そんな光景を見ていた俺は、思わず声を荒げる。

誰も傷ついてほしくない。

だからみんなには話さなかったのに！

「圭一君、どうしてそんなこと言うのかな？かな？」

「なんでっってお前……俺はただ」

「ならなんで、圭一君はここにいるの？」

レナは俺にグッと顔を近づけてきて、睨んでくる。

「俺はいいんだよっ！！けどみんなは」

パンッ！

レナの右手が、俺の頬を勢いよく叩いた。

「圭一君がよくて、レナたちがダメな理由って何かな？もしかして、レナたちじゃ役不足？足手まとい？」

「・・・そ、そんなことは」

「ならなんで圭一は一人でこんな危ないことしてるのかな？説明できる？」

「そ、それは・・・みんなに傷ついてほしくないから・・・」

「圭一君は、傷ついてもいいってコト？そんなの、ただの自己満足エゴだよだね？」

「そうだよ！その何が悪いってんだ！！」

「圭一君は何もわかってないね。わかってないよ・・・」
「けどそれなら、レナたちがここに着たのもただの自己満足 エゴ
って言えば、文句はないよね？」

「レナ・・・」

俺はレナの言葉に、思わず泣きそうになってしまった。

なぜなら、レナが本当に言わんとしてる事が解ったから。

ただの自己満足 エゴ。

自分で言ってるんだけど、なんて卑怯で優しい言葉なのだろうか。

「圭一、ボクは誰が欠けても惨劇を打ち破れたことにはならないと思うのです。だから、その……約束を破ってごめんなさいなのです」

「あらあら羽入。謝ることなんてありませんわ。全ては身勝手な圭一さんが悪いのですから」

「そうだよ。多分、羽入が話してくれなかったら、こちらは二度と圭ちゃんと部活が出来なくなってたかもなんだし」

「羽入、今回だけは感謝するのです。惨劇に部活メンバー抜きで挑もうとしたお馬鹿さんな圭一には、何かしてもらわないと気がすまないのです」

「はうう。れ、レナは圭一君を一日中撫で撫でしたりしてみたいかな、かな」

「レナ、残念なのです。さっき圭一を殴った時点でレナの好感度は急降下なのですよ。にぱ」

「は、はう！？け、圭一君ゴメンね！つい、殴っちゃったんだけど、別に嫌いだからとかじゃなくて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ」

俺は慌てふためくレナの頭の上に手を置いて撫でる。

「みんな、ありがとな」

今の会話で、みんなが言いたいことが伝わった。

皆の捻　ひね　くれたような言葉の中に感じたのは、まるで春のひだまりのように暖かい、そんな思いだ。

勘違いかもしれないけど、でも、“ここにみんながいる”それが何よりの証拠だろ？

「ッ！！レナ！危ない！」

突然、魅音が叫んだ。

俺の目に映ったのは、最後の抵抗とばかりに銃を拾い、それをレナに向ける小此木さん。

俺に出来ることはただ一つ、それは、誰も傷つけさせないことだ。

パンッ！パンッ！！

静かな森の中に、二発の銃声が鳴り響いた。

其の伍 終幕（後書き）

誤字脱字あつたら報告よろしく願ひします

其の六 終わりの始まり

ここはどこだ？

暗くて寒くて……そうか、そういえば俺は小此木さんに撃たれて……死んだ、のかな？

まあ、たぶんレナは守れただろうし、惨劇に打ち勝つことは出来たと思う。

みんなに、特に梨花ちゃんに未来を与えることがのはかなり嬉しい。

その場に俺だけいないのは少し寂しいけど、まあ、それが俺の運命なんだろうな。

さて、なんか眠くなってきたし、寝ようかな。

たぶん目を瞑ればすぐにでも眠れるはずだ。

……みんな、おやすみ。

―――なんだ？急に眩しくなって。

俺は渋々目を開く。

と、暗い闇のなかに、小さな光が見えた。

それはとても小さいけど、太陽のように暖かくて。

瞬間。

光は闇を全て包み込み、破裂した。

「……………いち……………圭――！！」

「な、んだよ……どうした？そんな顔してさ」

目が覚めると、まず視界に飛び込んできたのは梨花ちゃんの泣き顔だった。

年相応の女の子のように、顔をくしゃくしゃにして泣いている梨花ちゃん。

一体、何がどうなってるんだ？

「魅音！レナ！圭一の目が覚めたのです！！早く、早くするのです！！」

近くで羽入のはしゃいだような声が聞こえた。

「け、圭一ちゃん！！」

「ぐお……痛いぞ、魅音」

寝ている俺に、突然抱きついてくる魅音。

その顔は、歓喜のせいなのか、満面の笑みである。

目にはたくさん涙をためて、梨花ちゃんと同じく魅音も泣いていたことが窺えた。

「……圭一君、よ、よかったあ」

そんな魅音と梨花ちゃんの後ろで、ゆっくりと涙をこぼし始めるレナ。

「……なるほど。」

なんとなく状況が解った。

俺は小此木さんに撃たれて、んで病院に運ばれて、で、部活の皆コイツらは俺を心配してくれて。

そんで安心して泣いている、と。

「……まったく、なんて仲間想いの連中なんだ。」

「大袈裟だなあ」

俺は呟きながら天井を仰いだ。

なんかつられて泣きたくなっちまったじゃねえか。

念のため、唯一まともに喋れそうな羽入に質問してみる。

「なあ、羽入。今日は何月何日だ？」

すると羽入はにっこりと笑いながら答えた。

「あう。今日は7月4日。誰がなんと言おうと、紛れもなく7月4日なのです！」

7月4日。どうやら俺はかなりの間寝ていたらしい。

まあ、今はそんなことよりも。

「……………おめでとう」

そう言って、梨花ちゃんの頭を撫でた。

ようやく惨劇に打ち勝ったのだ。

祝福の言葉くらい、言わせてもらっぜ？

「・・・・・・・・馬鹿」

そう言いながら顔を赤くして目を逸らす梨花ちゃんを見て、俺は思わず微笑んだ。

目が覚めた俺は、羽入に監督を呼んできてもらい、ことの顛末を聞いた。

俺が撃たれたのを見たレナが小此木さんを半殺しにしてしまった以

外は、わりと穏便にことが進んだと言ってもいいだろう。

小此木さんは緊急入院。退院後逮捕予定。小此木さんに加担していた山狗の面々も逮捕。鷹野さんは、雛見沢症候群の症状が和らいだ後、自首をした。

証拠はなかったのだが、自分が殺してしまった人に対するせめての罪滅ぼしと言って、自ら富竹さんに両手を差し出した。

沙都子と詩音は、寝たきりの悟史に会う許可をもらい、涙ながらに再会を果たしたそうだ。

とりあえず、俺が撃たれたこと以外はあまり被害も出ずに、長年梨花ちゃんを苦しめてきた“惨劇”は幕を閉じたのだった。

――――ミンミンミンミン。

8月7日。

空は雲一つない晴天。

外では煩　うるさ　いくらい、蝉たちが歌を唄っている。

そんなありふれた夏の日に、俺はやっと退院できるようになった。

脇腹と肩。

銃の弾が貫通したその場所に多少跡が残るも、部活のみんなや色んな人がお見舞いに来てくれたかいもあり、全て完治した。

「んんっ!!」

入江診療所の入り口から外に出た俺は、雛見沢の空気を思い切り肺に流し込みながら、白のカッターシャツを揺らしつつ伸びをする。

「じゃあ監督。お世話になりました!」

「はい。前原さんもお元気で。体には気を付けてくださいね?」

「はい!んじゃあ鷹野さんも富竹さんも、また」

鷹野さんは、自首したということと、富竹さんの口添えもあって現在には釈放されている。

「はっはっは！圭一君、例の件については完成次第連絡するよ！」

「もう次郎さんったら・・・・・・・・それじゃあ、また遊びにきてね、圭一君」

俺はにっこりと笑みを返すと、約2ヶ月ぶりの自宅へ向けて駆け出した。

「たっただいまー！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

玄関のドアを勢いよく開いたまではいいが、俺はそのまま動きを停止させた。

こんな真っ昼間に誰もいないってのは、さすがにおかしいからだ。

「母さん！父さん！」

返事は……ないな。

「あれ？買い物にでも出かけてるのかな？」

俺は首を傾げつつ、とりあえず家のなかへ上がることにした。

「……………まじかよ」

キッチンの方へ行った俺が見たのは、信じられないものだった。

『懸賞で世界旅行が当たったので、しばらく留守にします

母より P・S・レナちゃんたちとの仲の進展を期待してる
わよ』

「……………人は入院してたってのに、何してんだあの両親は」

呆れ半分、連れていってもらえなかった悔しさ半分を込めて呟く。

「てか、退院早々自炊か……鬼畜すぎるだろ」

俺はこれからの生活に一抹の不安を覚えつつ、大きくため息をついた。

「って、冷蔵庫も買い置きインスタント食品もゼロかよっ!!」

とりあえず昼飯に何か食べようと冷蔵庫を開くと、中身はカラっぱ、ついでにインスタントラーメン等も底を尽きていた。

まじで鬼畜だな。よし、罰として父さんのエロコレクションの存在を母さんにチクろう。うん、それがいいな。

俺は父さんへの復讐を心に誓いつつ、書き置きと共に置いてあったお金の入った封筒を手にとる。

ちなみに、封筒の中身は1万円札が1枚と郵便局の通帳だった。

通帳の金額から察するに、かなりの期間戻ってこないつもりらしい。

本当、何考えてんだよ……………。

俺は再度ため息をつき、食品の買い出しのために玄関へ向かった。

「……………むむむ。安いけど調理するのめんどいしなあ……………
こはやっぱりカップラーメンで」

「ダメだよ圭一君」

家から一番近いスーパーに来た俺は、悩んだ末にカップラーメンを
買おうと思った矢先、後ろから聞き覚えのある声が。

「……………レナ、一体何してんだ？」

俺がそう質問すると、レナは首を傾げながら微笑む。

「たまたまだよ、だよ？」

「そ、そうだよな。この辺りのスーパーってココしかないし、偶然だよな、あははは」

いや、実を言つとめっちゃ焦った。

何故なら、“今の”俺には他の世界での記憶があるわけで。

その中には、レナが俺をストーカーする的世界もあったからだ。

いやあ、あの時は本当に怖かったなあ。

「……………圭一君、レナに何か言いたいことあるんじゃないのかな？かな？」

と、レナが俯 うつむ きながらそんなことを聞いてきた。

「へ？俺は別に……………」

いや、待て。このパターンはまさか……。

「……………嘘だ」

って、アレ？

予想してた言葉返ってきたのはいいが、迫力がないな。

「圭一君、ずっとレナから距離をとってる」

うつ…………それは、他の世界のレナがあまりにも病んでたからし
ようがないだろ？

「レナ、何かしたのかな？圭一君が嫌がるようなこと、いつのまに
かしちゃってたのかな？」

「いや、だからそういうわけじゃあ」

「でも、なら何で圭一君はレナと距離をとろうとするの？レナは、
レナはこんなにもはう!!!？」

涙目になりながら俺を見つめてきたレナの頭を、俺は知らないうちに撫でていた。

確かにそうだよな。

この世界のレナには、何も関係ない。

なのに俺は、この世界のレナを見ることをせずに、勝手に過去の柵しがらみにとらわれて。

「悪かったな」

できるだけ心を込めた言葉。きっとレナは、悩んでいたに違いない。

だから、せめて慰めてやるくらいはやってやりたいよな。

「……………うん。大丈夫だよ？」

レナはどこかすっきりしたように笑った。

「レナが“他の世界で”圭一君にしたことは、確かに少しは酷かったかもし」

そして、レナのその発言から知ることになる。

他の部活メンバーも、何故だかわからないが、他の世界の記憶を持っていることに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・少し、ねえ」

そんな俺の呟きは、スーパ―の特売を知らせる放送によってかき消された。

其の六 終わりの始まり（後書き）

ご都合主義よろしく、離見沢の惨劇をちゃっちやと終わらせました

とりあえず、これからが本番の予定です あ

誤字脱字があれば指摘よろしく願います

其の七 アグレッシブレナ（前書き）

ちゅーい。この話は作者の妄想で出来ていますので、心臓が悪い方、お子さま等は戻るボタンでお帰りください

其の七 アグレッシブレナ

「つて、確信犯かよっ！」

「えへへ〜」

「えへへ、じゃねえ！！！」

レナにも他の世界での記憶があるとカミングアウトされた、スーパーからの帰り道。

俺は、先ほどより凄いかミングアウトをされた。

だってレナのやつ、やっぱり俺をストーカーしてたみたいなのだ。

俺が診療所を出るところからずっとストーカーされてたわけだから、考えるとゾツとした。

その、ゾツ、が自分の鈍い勘に対するものなのか、レナ自身に対するものなのかはよくわからないんだが。

「つか、なんで俺のことストーカーするんだよ」

「だから、ストーカーじゃないんだよ！監視なの、監視！！」

レナが言うには、俺が変なことをしないように監視をしてる、という事なのだが、変なことって何だ？

「そんなのしなくても、俺は変なことなんてしないから安心しろって」

「だめだよ。圭一君が無茶して、死んじやったりしないように、今度はレナが圭一君を守るんだから」

「……無茶で死ぬ前に、レナから殺されそうな気が……」

「圭一君、今、何か言っただかな？かな？」

「なんでもないです」

レナがすんごい顔で睨んできたので、プイッとそっぽを向く。

つーかレナのやつ、自分のせいで俺が撃たれたこと、まだ気にしてるんだな。

「……まあ、俺がレナの立場なら、今のレナと同じようなことをしたかもしれないが。」

「それにしても腹減ったなあ」

そろそろ限界に近いお腹を擦りながら、手に持つビニール袋の中を見る。

そこにはインスタント食品の影すらなく、『体にいいから』という理由で、強制的に生野菜や生肉のパックなどが詰められている。

確かにこっちの方がインスタントより体にはいいだろうが、料理なんて出来ないぞ？俺。

ちなみに、レナには両親のことは内緒にしてある。

もし知ったら、レナのことだから何を言いだすか解ったもんじゃない。

「でね、圭一君。今日の晩ご飯はカレーでいいかな？かな？」

「ああ。カレーは好物だからな……………って、何言ってるんだ！？」

突然のレナの言葉に思わず返答してしまうも、その意味を理解して大きな声を出してしまう。

「だって、圭一君のご両親、旅行に行ってるじゃないんでしょ？圭一君、自分でご飯作れるの？」

「……………なんでそれを知ってた？まさか、人の家の中に勝手に侵入したりとか」

「ち、違うよお！レナ、まだこの世界では圭一君の部屋に無断で入ったりしてんだから！レナは圭一君のお母さんに、面倒見るようにって頼まれただけなんだよ、だよ！」

「……………この世界では」ってのが無性に気になるが、ま、まあいい。俺の寛大な心でスルーしてやろう。

てか、母さんが手紙に書いてた『P・S』の意味がようやく理解できたぜ……………。

「まあ、いいけどさ。でも、レナの父さんとかは気にしないで大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。ちゃんとお父さんにも許可もらってあるし」

「……許可？」

「うん。あ、そういえばお父さんが、『その内、圭一君で子とゆっくりお話ししたいなあ、あはははは』とか言ってたよ？」

「レナ、お前まじで鬼だな……」

俺は、レナの父さんから“お話”されるのを想像してげんなりした。

「鬼ってのはあんまりじゃないかな、かな？」

「いや、ぴったしお似合いだろ」

「むむ……今日の圭一君、意地悪だよね」

「誰のせいだ誰の………ってか、まじで飯作りに来てくれるのか？」

実際俺じゃ味噌汁すら作れないし、作ってくれるのはかなり有り難い。

「うん、作りに行く。……あ、荷物はちゃんとここにあるから大丈夫だよ」

そう言ったレナは、先ほどから持っていた大きなカバンを俺に見せてきた。

いや、気付いてたさ。スーパーに行くにはやけに大荷物だなあって。

「そんな大荷物持って、鍋かなんかするのか？」

俺がそう言つと、レナは照れたように頬に手を当てながらはにかんだ。

「違うよ。これはレナが、圭一君の家にお泊りするための道具だよ、だよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・あー、待て。何かとても不吉な単語が聞こえたような。

「すまん、もう一度言ってくれ」

「だから、レナは今日から圭一君の家にお世話になります！」

そんな、漫画やアニメでしか聞いたことのない台詞をさらっと吐いたレナを見ながら、俺は呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。

「・・・・・・・・どうする。どうするよ俺」

俺は一人、居間で苦悩する。

確かに、レナが家に泊りに来るなんてビックリハプニングは起きたが、まあ、嫌なわけじゃないし、むしろ嬉しいくらいだからいいと

しよつ。

先ほど食べた晩ご飯のカレーも美味かったし、デザートに出たフルーツヨーグルトも美味かった。

そんないいことづくめの中で、俺が何に苦悩しているかと言えば・・・もう、みんな察しがついているよな。

そう、家には俺とレナだけ。

そして、当の本人のレナは現在、入浴中なのだ。

わかるだろ？

覗きたくなるってのが男の性　さが　ってやつだ。

しかし俺は紳士である。

そのようなことをしていいのか、と、頭の上で天使と悪魔が大乱闘をしているのだ。

『断固としてダメだ！今まで培ってきた信頼が崩れてしまうじゃないか！』

『何を言ってる！こつやって泊りにまで来てるってコトは、つまりそういうことなんだよ！』

悪魔の言葉に、俺の心が揺れた。

そつだよな、こついうのつて、少くろいエロチックなハプニングが起きるのが定番だよな。

俺のなかの天使は死んだ。

「ぐふふふ・・・・・・・・いや、ここはちゃんと偶然を装わなければ・
・・」

逸 はや る気持ちを抑えつつ、俺は風呂場へと足を進める。

さあ、桃源郷はもうすぐそこだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・くつ」

風呂場へと続く脱衣場の前で唾を飲み、深呼吸をする。

ゆつくりとドアに手をかけ、桃源郷への第一歩を踏み出して――
――それは一気に冷めた。

色で言うならピンクから青に。

なぜならば、脱衣場には着替えと共に一本の鋭いナタが置いてあったからだ。

覗いてしまった場合の光景が頭に浮かぶ。

『あはははは、圭一君、少しお仕置きしないとだね』

ジーザス・・・・・・エロの神は俺を裏切りやがった。

絶望に染まる思考を切り替え、俺は自分の部屋へ逃走する。

「大丈夫さ。この昂ぶった気持ちは俺のコレクションが晴らしてくれ」

そう呟きながら部屋に飛び込むと、無残にゴミ箱へ突っ込まれたコ

レクシヨンの数々が。

「な、なんじゃこりやあああああああ！」

俺の叫びは、雛見沢の夜にこだました。

「うう．．．．．俺はこれから何を生き甲斐にして生きていけばいいんだ．．．．．」

俺は床に膝をつきながら落ち込む。

ああ、犯人らしき人物は一人しか心当たりがないな。

レナのやつ、一体何の恨みがあつて俺のコレクションに手を出したんだ？

「圭一君、お風呂上がったよ………って、アレ？何してるの？」

「……………何って、お前こそ何なんだよ！」

「……………ああ、そのえっちな本のことなのかな、かな？」

「そつだよ！人の許可なく、ゴミ箱に突っ込みやがって！」

「……………だつて、……だもん」

「ああ！？聞こえねえよ！！！」

「だつて、その本の女の子たち、髪が長くて胸も大きくて、レナとは全然違うんだもん！！！」

「……………は？お前何を言つてぬわあっ！？？」

突然、レナが俺に飛び掛かってきた。

「いててて……………レナ、いきなり何を」

ぶつけた頭を撫でながら、閉じた目をゆっくりと開いて、俺は驚愕した。

いつの間にか、レナは俺の上に馬乗りの状態になって座っていたのだ。

しかも、風呂上がりなのでレナからはとてもいい匂いがして鼻孔をくすぐる。

「レナ、言ったよね？レナにもずうっと昔からの記憶があるって。どの世界のレナも、だいたいの確立で圭一君にある感情を抱いていたんだよ？」

「ある、感情？」

「うん。前の世界のレナも、その前のレナも、そして現在　いまのレナも、圭一君のことが………大好き、なんだよ」

風呂上がりの熱さのせいか、はたまた別の何かか、レナの顔はみるみるうちに紅く染まっていく。

「だから、ね？レナ、何でもするから、どんなことでもするから、圭一君にはレナのことだけを見ていてほしいの。大丈夫だよ、ライバルは多いけど、レナ、勝ってみせるから」

突然の告白に、動きを止める俺。

（女の子から、レナから告白された！？）

頭のなかではその言葉が無限にリピートされ、俺は近づいてくるレナの顔を、ただただボーッと見つめることしか出来ない。

重なる唇。

初めてのキスは、緊張のせいか何の味もなかった。

「今日は、ここまでかな？」

レナはそう言い残して、顔を真っ赤にしながら俺の部屋から出ていった。

「……本を捨てた理由、結局聞きそびれたなあ」

天井を仰ぎながら、俺は小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1501m/>

ひぐらし・・・の？

2010年10月20日13時14分発行